

大学に 33 年間在籍して

北里大学名誉教授
三浦 寿男

創設時より 33 年間在籍した北里大学医学部を昨年 3 月に退任しました。長いような、短いような 33 年間でした。この 33 年間の思い出と将来への思いを皆様にお伝えしたいと思えます。昭和 45 年 3 月に北里大学医学部の新設が認可されました。あわただしく入学試験を行い、同年 5 月に第 1 回生が入学しましたが、この時の新入生とともに、私は相模原にきました。

当時は、翌年の開院を目標に、病院建設の真っ只中で、建物の鉄骨は露出し、日照りが続けば周囲は茶色の土煙り、資材運搬のトラックでも通れば、目も開けていられない状態でした。また、雨が続けば土煙りはぬかるみと化し、一歩足をとられれば靴は脱げ、その後は靴を両手に持って、はだしで歩かなければならない始末でした。

私が相模原に赴任した当時、大学病院前のバス通りは未だ舗装されておらず、最寄りの小田急線相模大野駅から病院へ至る区間の信号機は、ベトナム戦争最中の当時の米軍病院、現在は大型マンション群となったロビーシティ相模大野角の、国道 16 号線へ抜ける通りとの交差路 1 ヶ所のみでした。バス所要時間は 10 分内外でした。その後、交通量は増え、現在同区間の信号機は 15、6 ヶ所に増え、バス所要時間も当時の 2、3 倍になりました。見たところ、もはや信号機を設置する交差路もない様で、渋滞は増す一方となりました。

このような周辺環境の変化の中で、医学部創立 30 余年を経て、医学の卒前、卒後教育ならびに医療と医療制度は急速に大きく変わりつつあります。そして、医学や医療をめぐる、社会的あるいは倫理的な問題を指摘する風潮が急速に高まっています。われわれが携わる小児医療は、複雑な社会環境、親子関係の中で子供の心身の病を治し、さらに小児の心身の健康増進を促すという、教育的配慮を含めた医療が大きな部分を占めるようになっていきます。

医に従事するものは、医学的知識を有し、医学的技術を備えているのは当然ですが、その根底には深いヒューマニズムがなければなりません。医学は常に進歩し、これに伴い医療は大きく変化していきます。振り返りますと、北里大学医学部設立の根本理念ならびにカリキュラム編成上の根本方針に、人格形成教育の徹底と日進月歩の科学に対応できる能力の育成がうたってあります。

また、21 世紀の医学・医療は、遺伝子の時代、倫理・生命倫理の時代、国際化の時代といわれています。医師と患者の関係は、患者の人権の確立が叫ばれ、インフォームドコンセントの重視、患者の自己決定権の尊重、病歴などの情報開示の方向に進んでいます。医学生としても、これらのことに無関心であってはなりません。

私自身は、てんかん患児の診療とその薬物療法に関わる抗てんかん薬の体内動態の研究を主要テーマに、30 数年間にわたり、多くの患児を対象に臨床研究を続けてきました。その成果が認められ、四つの関連全国大会を主催させて頂きました。とくに、平成 10 年 10 月と平成 11 年 6 月に続けて、第 32 回日本てんかん学会、第 16 回日本 TDM 学会をそれぞれパシフィコ横浜で開催したことは大変光栄な出来事でした。

退任 1 年前の一昨年には北京と吉林へ、2 度中国を訪問しました。最近は癒しの大切さが叫ばれていますが、中国の古い諺に、「小医は病を癒し、中医は人を癒す。大医は国を癒す。」というのがあるそうです。大学の医学教育は、多くの中医を育てる教育であって欲しいと思いますし、臨床医の方々には立派な中医になって頂きたいと思います。戦後初の新設医学部に長年在籍しての雑感を記しました。